

国際芸術祭「あいち」組織委員会 運営会議

次 第

日時：2022年2月7日（月）

午後2時00分から

場所：国際芸術祭「あいち」

組織委員会事務局内

1 開 会

2 議 事

報告事項

国際芸術祭「あいち2022」参加決定アーティストについて
現代美術展チケット情報について

3 閉会

<配付資料>

資料1：国際芸術祭「あいち2022」参加決定アーティスト一覧

資料2：現代美術展チケット情報

参加アーティスト一覧

2022年2月15日時点、アルファベット順。

	アーティスト名 (グループ名を含む)		生/結成年(没年)	出身/結成地	活動拠点
New	足立 智美	ADACHI Tomomi	1972	日本	ドイツ
	ホダー・アフシャール	Hoda AFSHAR	1983	イラン	豪州
New	AKI INOMATA	AKI INOMATA	1983	日本	日本
	リリアナ・アングロ・コルテス	Liliana ANGULO CORTÉS	1974	コロンビア	コロンビア
New	レオノール・アントゥネス	Leonor ANTUNES	1972	ポルトガル	ドイツ
New	荒川 修作+マドリン・ギンズ	ARAKAWA and Madeline GINS	1936(2010)/ 1941(2014)	日本/米国	米国
New	カデール・アティア	Kader ATTIA	1970	フランス	ドイツ
New	ローター・バウムガルテン	Lothar BAUMGARTEN	1944(2018)	ドイツ	ドイツ/米国
New	ディードリック・ブラッケンズ	Diedrick BRACKENS	1989	米国	米国
New	ロバート・ブリア	Robert BREER	1926(2011)	米国	フランス/米国
New	マルセル・ブロータース	Marcel BROODTHAERS	1924(1976)	ベルギー	ベルギー/ ドイツ/英国
New	曹斐(ツァオ・フェイ)	CAO Fei	1978	中国	中国
	ヤコバス・カポーン	Jacobus CAPONE	1986	豪州	豪州
	ケイト・クーバー	Kate COOPER	1984	英国	英国/オランダ
New	パブロ・ダヴィラ	Pablo DÁVILA	1983	メキシコ	メキシコ
New	クラウディア・デル・リオ	Claudia DEL RÍO	1957	アルゼンチン	アルゼンチン
	メアリー・ダバラニー	Mary DHAPALANY	1950	豪州	豪州
	遠藤 薫	ENDO Kaori	1989	日本	日本
New	シアスター・ゲイツ	Theaster GATES	1973	米国	米国
	潘逸舟(ハン・イシュ)	HAN Ishu	1987	中国	日本
New	服部 文祥+石川 竜一	HATTORI Bunsho+ISHIKAWA Ryuichi	1969/1984	日本	日本
New	ニーカウ・ヘンディン	Nikau HINDIN	1991	ニュージーランド (アオテアロア)	ニュージーランド (アオテアロア)
New	許家維(シュウ・ジャウエイ)	HSU Chia-Wei	1983	台湾	台湾
New	石黒 健一	ISHIGURO Kenichi	1986	日本	日本
New	ミット・ジャイイン	Mit JAI INN	1960	タイ	タイ
New	ジャッキー・カルティ	Jackie KARUTI	1987	ケニア	ケニア
	河原 温	On KAWARA	1932(2014)	日本	米国
New	ユキ・キハラ	Yuki KIHARA	1975	サモア	サモア
	バイロン・キム	Byron KIM	1961	米国	米国
New	岸本 清子	KISHIMOTO Sayako	1939(1988)	日本	日本
New	小寺 良和	KODERA Yoshikazu	1957	日本	日本
New	鯉江 良二	KOIE Ryoji	1938(2020)	日本	日本
	アンドレ・コマツ	André KOMATSU	1978	ブラジル	ブラジル
New	アブドゥライ・コナテ	Abdoulaye KONATÉ	1953	マリ	マリ
New	近藤 亜樹	KONDO Aki	1987	日本	日本
	小杉 大介	Daisuke KOSUGI	1984	日本	ノルウェー
New	黒田 大スケ	KURODA Daisuke	1982	日本	日本
New	グレンダ・レオン	Glenda LEÓN	1976	キューバ	スペイン
New	タニヤ・ルキン・リンクレイター	Tanya LUKIN LINKLATER	1976	米国	カナダ
New	ニヤカロ・マレケ	Nyakallo MALEKE	1993	南アフリカ	南アフリカ

	アーティスト名 (グループ名を含む)		生 / 結成年 (没年)	出身 / 結成地	活動拠点
	ミッシュック・マサンヴ	Micheck MASAMVU	1980	ジンバブエ	ジンバブエ
New	升山 和明	MASUYAMA Kazuaki	1967	日本	日本
New	バリー・マッキー	Barry MCGEE	1966	米国	米国
New	ミルク倉庫+ココナッツ	mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts	2015結成	日本	日本
	三輪 美津子	MIWA Mitsuko	1958	日本	日本
New	宮田 明日鹿	MIYATA Asuka	1985	日本	日本
	モハンマド・サーミ	Mohammed Sami	1984	イラク	英国
	百瀬 文	MOMOSE Aya	1988	日本	日本
New	デルシー・モレロス	Delcy MORELOS	1967	コロンビア	コロンビア
New	迎 英里子	MUKAI Eriko	1990	日本	日本
New	奈良 美智	NARA Yoshitomo	1959	日本	日本
New	トゥアン・アンドリュウ・グエン	Tuan Andrew NGUYEN	1976	ベトナム	ベトナム
New	尾花 賢一	OBANA Kenichi	1981	日本	日本
New	大泉 和文	OIZUMI Kazufumi	1964	日本	日本
	奥村 雄樹	OKUMURA Yuki	1978	日本	ベルギー / オランダ
New	ローマン・オンダック	Roman ONDAK	1966	スロバキア	スロバキア
New	小野澤 峻	ONOZAWA Shun	1996	日本	日本
New	ガブリエル・オロスコ	Gabriel OROZCO	1962	メキシコ	日本 / メキシコ
	カズ・オオシロ	Kaz OSHIRO	1967	日本	米国
New	ティエリー・ウッス	Thierry OUSSOU	1988	ベナン	オランダ
New	リタ・ボンセ・デ・レオン	Rita PONCE DE LEÓN	1982	ペルー	メキシコ
	プリンツ・ゴラーム	Prinz Gholam	2001結成	ドイツ / レバノン	ドイツ
New	ジミー・ロバール	Jimmy ROBERT	1975	フランス	ドイツ
New	フロレンシア・サディール	Florencia SADIR	1991	アルゼンチン	アルゼンチン
	眞田 岳彦	SANADA Takehiko	1962	日本	日本
New	ファニー・サニン	Fanny SANÍN	1938	コロンビア	米国
	笹本 晃	SASAMOTO Aki	1980	日本	米国
New	イワニ・スカーセ	Yhonnie SCARCE	1973	豪州	豪州
New	塩見 允枝子	SHIOMI Mieko	1938	日本	日本
	塩田 千春	SHIOTA Chiharu	1972	日本	ドイツ
New	田村 友一郎	TAMURA Yuichiro	1977	日本	日本
New	和合 亮一	WAGO Ryoichi	1968	日本	日本
New	渡辺 篤 (アイムヒア プロジェクト)	WATANABE Atsushi (I'm here project)	1978	日本	日本
New	西瓜姉妹 (ウォーターメロン・シスターズ)	Watermelon Sisters	2017結成	台湾 / シンガポール	台湾 / ドイツ
New	ケイリーン・ウイスキー	Kaylene WHISKEY	1976	豪州	豪州
New	イー・イラン	YEE I-Lann	1971	マレーシア	マレーシア
	横野 明日香	YOKONO Asuka	1987	日本	日本

アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。ただし、出身国や地域の慣習またはアーティスト自身の希望により、姓名順ではない表記も一部あります。参加アーティストの生没年、出身地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

足立 智美

Adachi Tomomi

1972年石川県生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

パフォーマー／作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン(ロンドン、英国)、ハンブルガー・バーンホフ美術館(ベルリン、ドイツ)、ボンピドゥー・センター(パリ、フランス)、ベルリン・ボエジー・フェスティバル(ドイツ)など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。2012年DAADベルリン芸術家プログラムによりベルリンに招聘、アルス・エレクトロニカ(リンツ、オーストリア)より 優秀賞 を2019年に受賞。



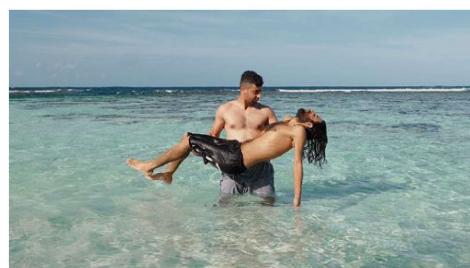
《立体印刷されたテキスト》2017

ホダー・アフシャール

Hoda Afshar

1983年テヘラン(イラン)生まれ。メルボルン(豪州)拠点。

ホダー・アフシャールは、ドキュメンタリー的な映像制作の本質と可能性を探究する。写真と映像にまたがる表現をとおしてジェンダーや周縁性、移動について考察。作品では、イメージとの戯れやドキュメンタリー写真の概念的で演出的な側面を融合させることで、伝統的な映像実践を断ち切る試みを行う。近年の展覧会に「WE CHANGE THE WORLD」ビクトリア州立美術館、「PHOTO 2021」(共に2021年、メルボルン、豪州)、ラホール・ピエンナーレ02(2020年、パキスタン)、「Defining Place/Space: Contemporary Photography from Australia」サンディエゴ写真美術館(2019年、カリフォルニア、米国)、「Primavera 2018」オーストラリア現代美術館(シドニー)など。2015年にはNational Photographic Portrait賞、2018年にはBowness Photography賞を受賞(共に豪州)。



《リメイン》2018
© the artist and Milani Gallery

AKI INOMATA

1983年東京都生まれ。東京都拠点。

生きものとの関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。主な作品に、都市をかたどった透明なヤドカリの殻をつくり実際に引っ越してもらった《やどかりに「やど」をわたしてみる》、近代以前には貨幣としても使用された貝殻を現代の通貨と結びつけ「貨幣の化石」を作りだす試みである《貨幣の記憶》など。

主な個展に、十和田市現代美術館(2019年、青森)、北九州市立美術館(2019年、福岡)、ナント美術館(2018年、フランス)。国際展・グループ展に、「Broken Nature」ニューヨーク近代美術館(2021年、米国)、第22回ミラノ・トリエンナーレ(2019年、トリエンナーレデザイン美術館、イタリア)、タイ・ピエンナーレ2018(クラブ)など。



《彼女に布をわたしてみる》2021
Courtesy of Maho Kubota Gallery

リリアナ・アングロ・コルテス

Liliana Angulo Cortés

1974年ボゴタ(コロンビア)生まれ。ボゴタ(コロンビア)拠点。

アフリカ系アーティスト、リリアナ・アングロ・コルテスは、コロンビア国立大学卒業後、イリノイ大学シカゴ校にて美術の修士号を取得。様々な地域のアフリカ人ディアスポラで活動し、グループ型の手法と批判的な芸術実践を通じてアフリカ系コミュニティの抱える困難を浮き彫りにすることを目指す。

彼女は、表象やアイデンティティにまつわる問いや、人種や脱開発論についての議論に関する問いから、記憶や権力のあり様を考察する。それらの課題と向き合うため、プロジェクトに参加する人々の身体や、イメージ、経験を通して、ジェンダー、民族性、言語、歴史、政治について考えていく。彼女の芸術実践は、複数のメディア、パフォーマンス活動、文化的慣習、歴史的賠償、また社会組織との共同制作などの要素を包含する。これまでコロンビア国内外で個展やグループ展に参加。芸術活動は必要不可欠であるという理解のもと、芸術分野のあらゆる側面で活躍する。ボゴタ市の文化部門とも協働したことがある。



《Un negro es un negro》「Porters Wigs」シリーズ、1997-2001
Courtesy of the artist

レオノール・アントウネス

Leonor Antunes

1972年リスボン(ポルトガル)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

20世紀の建築、デザイン、アートの歴史と向き合うレオノール・アントウネスは、日用品の機能を見つめ直し、モダニズムのフォルムを彫刻で表現する可能性を考察する。制作の過程では、オブジェに埋め込まれたコード化された価値や見えないアイデアの流れを追究し、抽象的な新たな形に組み立て直す。また南米、メキシコ、ポルトガルの伝統の職人技を取り入れながら、合理的なデザインの裏にある構造原理や、幾何学的な形に還元することで現実を抽象化するというプロセスの理解も試みる。主なインスピレーション源は、社会的・政治的にラディカルなだけでなく、アートやデザインを通じた日常生活の向上を願う、女性アーティストの実践だ。最近の個展はMudam(2019年、ルクセンブルク)、The Box(2019年、ブリュッセル、英国)、サンパウロ美術館(2019年、ブラジル)。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ(2019年、イタリア)ポルトガル館代表で、パリのフェスティバル・ドートンヌ(2021年、フランス)にも参加。



《the homemaker and her her domain》2021、
「フェスティバル・ドートンヌ」/国立高等美術学校(フランス)
Photo: Nick Ash. Courtesy of the artist: Air de Paris, Románville and Marian Goodman
Gallery, New York, Paris, London

荒川 修作+マドリン・ギンズ

ARAKAWA and Madeline Gins

荒川 修作 1936年愛知県生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2010年、同地で没。

マドリン・ギンズ 1941年ニューヨーク(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2014年、同地で没。

美術家の荒川修作と詩人のマドリン・ギンズは、共に哲学・科学・芸術を統合する創造家を意味する「コーデノロジスト」を称した。荒川は初期の立体作品から一連のダイアグラム絵画作品を経てギンズとの建築作品に至るまで、一貫して世界を多様に認知する方法を、身体を中心とした環境を創造し模索し続けた。代表作に「意味のメカニズム」(1963年-)、「問われているプロセス/天命反転の橋」(1973-1989年)、建築作品に奈義町現代美術館の「遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」(1994年)、「養老天命反転地」(1995年)、「三鷹天命反転住宅 In Memory of Helen Keller」(2005年)などがある。

主な個展は「荒川修作展 絵画についての言葉とイメージ」(1979年、西武美術館、東京)、「荒川修作の実験展一見のものがつくれる場」(1991-92年、東京国立近代美術館他)、「Reversible Destiny—Arakawa/Gins」(1997年、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、米国)など。



《問われているプロセス/天命反転の橋》1973-89 Estate of Madeline Gins
Photo: 上野河宏 ©2016 Estate of Madeline Gins. Reproduced with permission of the Estate of Madeline Gins.

カデル・アティア

Kader Attia

1970年デュニー(フランス)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

カデル・アティアは、西洋文化の覇権主義と植民地主義が広範囲に及ぼす影響を探求しているアーティスト。その探求の中心には「損傷と修復」という概念があり、建築、音楽、精神分析、医学、ヒーリングや霊性思想など、様々な分野の知見を結びつけている。彫刻から映像インスタレーションまで、マルチメディアを駆使した彼の作品において、「修復」とは無傷の状態に戻るのではなく、心の傷の非物質的な痕跡を目に見える形にするもの。そのアプローチは、パリのバンリュー区域(banlieue = フランス都市郊外の低所得者向け住宅開発エリア)とアルジェリアで育ったアティア自身の経験に基づいている。



《リフレクティヴ・メモリー(Réfléchir la Mémoire)》2016
© Kader Attia
Courtesy of the Artist. Collection MACVAL, France, Collection MAC Marseille, France, Galleria Continua, Galerie Krinzinger, Lehmann Maupin and Colerie Nagel Draxler

ローター・バウムガルテン

Lothar Baumgarten

1944年ラインスベルグ(ドイツ)生まれ。ベルリン(ドイツ)、ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2018年ベルリン(ドイツ)にて没。

ローター・バウムガルテンの芸術作品は、民族学的、人類学的なテーマを追求し、その中の課題に鑑賞者の注目を向け、対峙する状況を作り出す。これまで幅広いメディア—エフェメラル(一時的)な彫刻、写真、スライド投影、映画、録音、版画、本、短編小説、あるいはサイト・スペシフィックな介入や壁画—を用いて、視覚情報や言語情報に基づく記憶、表象する体制について考察してきた。1977年に南米に行き、1980年までベネズエラとブラジルの国境地帯に住むヤノマミ族の2部族と共に過ごす。その経験は、1960年代後半から70年代前半にかけての想像上の旅や風景を扱った作品から、その後の文化的差異を検証する作品へと移行するきっかけとなった。

第41回ヴェネチア・ビエンナーレ(1984年、イタリア)にドイツ代表として参加し、金獅子賞を受賞。世界の主要美術館で個展を開催し、ドイツのカッセルで開催されるドクメンタには第5回(1972年)、第7回(1982年)、第9回(1992年)、第10回(1997年)に参加した。



《Tetrahedron》1968
©Lothar Baumgarten Estate, VG Bild Kunst

ディードリック・ブラッケンズ

Diedrick Brackens

1989年メヒア(米国)生まれ。ロサンゼルス(米国)拠点。

アフリカ系アメリカ人とクアである自身のアイデンティティを軸に、アメリカ史などの幅広いをテーマを扱い、寓話や物語を題材にしたタペストリー作品で知られる。西アフリカの織物、米国南部のキルト、欧州のタペストリーなどを用い、抽象かつ具象な表現を展開。残酷な歴史を抱える「綿」を自ら染め、「男性の優しさ」をテーマにアフリカ人やアフリカ系アメリカ人による文学、詩、民話などを参照しながら、労働や移民の複雑な歴史と、アフリカ系アメリカ人として生きることの豊かさや繊細さを示す。市販染料に加えワイン、茶葉、漂白剤など独自の染料も用いた色鮮やかな作品は、マジック・リアリズム的な世界観と現在が交差し、空白の歴史を考察する。

近年の展示に「Diedrick Brackens: Ark of Bulrushes」スコッツデール現代美術館(2021年、米国)、「Diedrick Brackens: darling divined」ニュー・ミュージアム(2019年、ニューヨーク、米国)など。



(Summer somewhere (for Danez)), 2020 Private collection, New York, NY.
© Diedrick Brackens. Courtesy of the artist, Jack Shainman Gallery, New York and Various Small Fires, Los Angeles.

ロバート・ブリア

Robert Breer

1926年アトロイト(米国)生まれ。パリ(フランス)拠点に活動後、2011年ツーソン(米国)にて没。

ロバート・ブリアの作品は、映画とアートのダイナミックな相互作用によって成り立っている。映像彫刻、ドローイング、絵画など、多様で複雑で奔放な彼の作品は、テクノロジーなど常に新しい領域との対話を実践。実験、偶然性、永遠性などの概念を、ユーモアと哲学で表現するのも特徴である。

1980年、ホイットニー美術館(ニューヨーク、米国)で初の回顧展を開催後、個展多数。1981年、フィルム・フォーラム(ニューヨーク)の外壁に大型の壁画を制作。受賞歴にオーバーハウゼン国際短編映画祭(1969年、ドイツ)マックス・エルンスト賞、スタン・ブラッケージ・ビジョン賞(2005年、デンバー、米国)など。2010-2012年にティンゲリー美術館(バーゼル、スイス)、バルティック現代美術センター(ゲーツヘッド、英国)、ポルドー現代美術館(フランス)で回顧展。近年の個展にシャルジャ芸術財団(2016年、アラブ首長国連邦)、アントニオ・ダレ・ノガレ財団(2021-2022年、イタリア)など。



(FLOAT) 1970
Courtesy of Kate Flax and gb agency, Paris Commission : Sharjah Art Foundation

マルセル・ブロータース

Marcel Broodthaers

1924年ブリュッセル(ベルギー)生まれ。ブリュッセル(ベルギー)、デュッセルドルフ、ベルリン(ともにドイツ)、ロンドン(英国)拠点に活動。1976年、ケルン(ドイツ)にて没。

1963年までは主に詩人として活動後、晩年の12年間に発表した多様で難解な作品の数々で、後のアーティストに大きな影響を与えた。ブロータース作品は、アートが規則やプロトコルによって決定されるという事実を諷刺的にすることで、美術館の中立性の神話を諧謔的に覆す。1969年以降は自らの「美術館部門」を立ち上げ、数々の展覧会に出品。言語、言葉とイメージ、レトリックの本質を巡るブロータースの作品は、詩、文章、映画、写真、スライド、ドローイング、絵画、彫刻など様々な表現形式に及ぶ。

ドクメンタ5(1972年)、7(1982年)、10(1997年、以上全てカッセル、ドイツ)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2015年、1980年、1978年、1976年、イタリア)に参加。2016年、ニューヨーク近代美術館(米国)にて回顧展を開催後、ソフィア王妃芸術センター(2016年、マドリッド、スペイン)、ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館(2017年、デュッセルドルフ、ドイツ)へ巡回。



(Entrance to the Exhibition (L'entrée de l'exposition!)) 1974
[Catalogue-Catalogus]ノレ・ア・ボザール(ブリュッセル)
Photo: Philippe De Gobert Copyright Estate Marcel Broodthaers

曹斐(ツァオ・フェイ)

Cao Fei

1978年、広州(中国)生まれ。北京(中国)拠点。

国際的に名のある現代美術家。社会批評、ポップカルチャー、ドキュメンタリーの手法を織り交ぜ、シュルレアリスムも参照しつつ、今日の中国社会の急激な発展や変化を反映した映画やインスタレーションを制作。

近年の主な個展に、ニューヨーク近代美術館 PS1(2016年、米国)、大館現代美術館(2018年、香港)、K21 州立美術館(2018年、デュッセルドルフ、ドイツ)、ボンビドー・センター(2019年、パリ、フランス)、サーベントイン・ギャラリー(2020年、ロンドン、英国)、ユーレンス現代美術センター(2021年、北京、中国)、MAXXI(2021年、ローマ、イタリア)。これまで参加した国際展に、上海ビエンナーレ(2004年、中国)、モスクワ・ビエンナーレ(2005年、ロシア)、台北ビエンナーレ(2006年、台湾)、第15/17回シドニー・ビエンナーレ(2006/2010年、豪州)、イスタンブール・ビエンナーレ(2007年、トルコ)、横浜トリエンナーレ(2008年)、第50/52/56回ヴェネチア・ビエンナーレ(2003/2007/2015年、イタリア)など。



(新星) 2019
Courtesy of the artist, Vitamin Creative Space and Sprüth Magers

ヤコバス・カポーン

Jacobus Capone

1986年バース(豪州)生まれ。フリーマントル(豪州)拠点。

ヤコバス・カポーンは、パフォーマンスや写真、ビデオ・インスタレーション、絵画、サイト・スペシフィック作品などを取り入れた活動を継続して行う。詩的な表現が特徴的な彼の表現の根底には、他者にどのように知覚されようとも、すべての行為を一つの生きた経験へと統合しようとする全体論的な性質がある。2007年には、豪州を徒歩で横断し、インド洋の海水を太平洋に注いだ。

作品は台北市立美術館(台湾)、クラワラ美術館(豪州)、MOMENTUM(ベルリン、ドイツ)など世界各地で展示されており、バース・インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート(豪州)ではバース国際芸術祭2017の一部として個展「Forgiving Night for Day」を開催した。その他、数多くの国際的なフェスティバルやフェローシップ、アーティスト・イン・レジデンスに参加しており、2016年にはJohn Stringer賞を受賞。



「Forewarning, Act 2 (Sincerity & Symbiosis)」2019
Courtesy of the artist and Moore Contemporary

ケイト・クーパー

Kate Cooper

1984年リヴァプール(英国)生まれ。ロンドン(英国)及びアムステルダム(オランダ)拠点。

近年開催した個展は「Symptom Machine」SCAD美術館(2021年、ジョージア、米国)、「Screens Series: Kate Cooper」ニュー・ミュージアム(2020年、ニューヨーク、米国)、「Symptom Machine」ハイワード・ギャラリー(2019年、ロンドン、英国)、「Sensory Primer」ア・テイル・オブ・ア・タブ(2019年、ロッテルダム、オランダ)など。また、グループ展では台北市立美術館(2021年、台湾)、2021ニュー・ミュージアム・トライエンニアル(ニューヨーク、米国)、デュッセルドルフ美術館(2021年、ドイツ)、パレ・ド・トーキョー(2020年、パリ、フランス)、ミシガン大学美術館(2019年、アナーバー、米国)、アムステルダム市立美術館(2018年、オランダ)、ボストン現代美術館(2018年、米国)などで作品を発表している。



「インフュージョン・ドライバース」2018
Image courtesy of the artist

パブロ・ダヴィラ

Pablo Dávila

1983年メキシコシティ(メキシコ)生まれ。メキシコシティ(メキシコ)拠点。

従来のメディアムを起点に多分野に渡りながら、空間と時間の社会的構造を投影する作品を制作。メキシコシティを拠点とし、シンプルかつ豊かな直感を引き出すフォルムを用いるその作品は、干渉と曖昧さの空間を掘り起こす。映像、電子作品、ライトインスタレーション、写真、絵画、サイト・スペシフィック作品など様々な形で知覚、空間、時間意識を考察し、感覚と主観性を探る。その詩的なジェスチャーは、過ぎ去る時間に対する私たちの期待や、記憶の中の出来事を処理する心理的レンズに疑問を呈し、感覚的な知覚と認知的な理解を横断する。科学、音楽、詩、認知科学、物理現象を参照することで、知覚、時間の儚さ、歴史的解釈の概念を掘り下げる。

メキシコでの主な展示歴にルフィーノ・タマヨ美術館(メキシコシティ)、モンテレイ現代美術館、ホセ・ガルシア(メキシコシティ/メリダ)、トラヴェシア・クアトロ(グアダハラハラ)など。その他、ザ・ビル(イスタンブール)、ポール・カスミン(ニューヨーク)など多数。



「転移の調和 (Armonías de transferencia)」2020
Courtesy of the artist

クラウディア・デル・リオ

Claudia Del Río

1957年ロザリオ(アルゼンチン)生まれ。ロザリオ(アルゼンチン)拠点。

アート、詩、教育の狭間にいる彼女のプロジェクトは幅広く多面的だが、共通する興味はアートと人々の幸福との関係だ。絵画を学び、パフォーマンス、メール・アートなどの活動に参加し、コミュニケーション、人との交流、社会ネットワークに関心を抱く。ローカルとグローバルの緊張関係に触発され、国民性やジェンダーのアイデンティティがいかに形成され変容するかという疑問から多くの作品を制作。コラーージュ、ドローイング、刺繍、フォトモンタージュなどによる作品は、政治的かつユーモラスで、消費主義、学校教育、新聞等のパブリックな想像体が集団生活に及ぼす影響を追求する。2002年以降、他のアーティスト、機関、一般市民との関わりが結実して共同設立したClub del Dibujo(ドローイングクラブ)を思索と行動の場とする。アルゼンチン代表としてサルト(2014年、ウルグアイ)、メデジン(2013年、コロンビア)、メルコスール(2012年、ブラジル)、ハバナ(1997年、キューバ)の各ビエンナーレに参加。



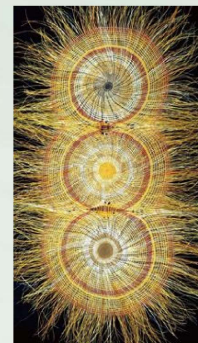
「コーン・キッズ」2015 Photo: Viviana Gil
Courtesy of Museo de Arte Moderno de Buenos Aires, Argentina

メアリー・ダパラニー

Mary Dhapalany

1950年ガルビル(豪州)生まれ。ラミンジニング(豪州)拠点。

メアリー・ダパラニーは誇り高きマンダラブイ族の女性として、40年以上芸術活動を続けている。彼女の編む作品は、先祖の女性たちが代々編み手として受け継いできた伝統工芸の象徴である。現在70代のダパラニーは、タコノキの葉で作った作品(ガンガ)を染めるため、土顔料や植物の根から抽出した天然染料を用いる。ダパラニーの作品は、ビクトリア州立美術館(メルボルン、豪州)、アートバンク(シドニー、豪州)、シカゴ大学ブース・スクール・オブ・ビジネス(米国)など多数のコレクションに収蔵されている。



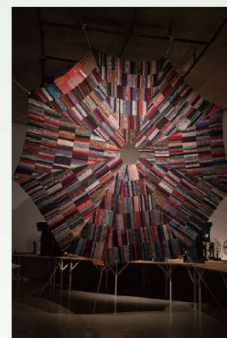
《マツ》2020
Courtesy of Bula'Bula Arts

遠藤 薫

Endo Kaori

1989年大阪府生まれ。大阪府及び沖縄県拠点。

2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ(絨織、重要無形文化財保持者)主宰、アルスシムラ卒業。ベトナムと沖縄、東京と各地方を拠点に、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて、制作発表を続けている。主に雑巾や落下傘、船の帆を制作し「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマンスにトレスし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。最近の主な展示に「第13回 shiseido art egg」資生堂ギャラリー(2019年、東京)、「Welcome, Stranger, to this Place」東京藝術大学大学美術館(2021年)など。「第13回 shiseido art egg」ではart egg大賞を受賞した。



《閃光と落下傘》2020、国際芸術センター青森
Photo: Delphine Parodi

シアスター・ゲイツ

Theaster Gates

1973年シカゴ(米国)生まれ。シカゴ(米国)拠点。

シアスター・ゲイツは彫刻、パフォーマンス、そして空間理論や土地開発に従事した作品を創り出している。彼の作品では、コミュニティなどの集団的願望、芸術の主体性、実践主義的な戦略から定義される黒人文化の空間がテーマになっている。

世界各地で作品を発表するゲイツは、2021年王立英国建築家協会にて名誉研究員に選抜されたほか、受賞歴に第26回クリスタル賞(2020年、スイス)、J.C. Nichols Prize for Visionaries in Urban Development(2018年、米国)、ナッシャー彫刻賞(2018年、米国)など多数。シカゴ大学視覚芸術学部の教授を務め、同学の文化革新シニア・アドバイザーを兼任する。

2010年には、非営利財団リビルド・ファウンデーションをシカゴのサウスサイド地区に設立。アートや文化の発展、地域改革を目的に、無料アートプログラムなどを通じ、アーティストの支援やコミュニティの活性化も展開している。



《アフロ・イケバナ》2019
© Theaster Gates Photo: Theo Christelis, Image courtesy of White Cube

潘逸舟(ハン・イシュ)

Han Ishu

1987年上海(中国)生まれ。東京都拠点。

幼少期に上海から青森に移住した経験をきっかけに、異なる環境の中で生まれた土地と人間、共同体と個人の見えない関係性を、自らの身体を軸に考察してきた。作品においては映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真などの様々なメディアを用いて表現している。

これまでに、水戸芸術館、弘前れんが倉庫美術館、東京都現代美術館など国内各地の他に、ボストン美術館(米国)、ユダヤ博物館(ニューヨーク、米国)、上海当代美術館(中国)などで展示し、豪州と米国でアーティスト・イン・レジデンスに参加。また、日産アートアワード2020にてグランプリ受賞。



《はうれん草たちが日本語で夢を見た日》2020、神戸アートビレッジセンター
Photo: 表恒臣

服部 文祥+石川 竜一

Hattori Bunsho + Ishikawa Ryuichi

必要最小限の装備で、狩猟や釣りなどで食料を調達しながら旅をするサバイバル登山家の服部文祥は、写真家の石川竜一とともに2015年から二人で登山を行う。その体験を服部は書籍『獲物山』と『獲物山II』（2016、2019年）、石川は展覧会「CAMP」（2016年）や写真集『いのちのうちがわ』（2021年）で発表。「あいち2022」では再びタッグを組み、2021年に北海道南西部で臨んだサバイバル登山をもとに新作を制作。



服部文祥 (2016年北海道増毛山塊修富川) 2016
Photo: 亀田正人

服部 文祥

1969年神奈川県生まれ。神奈川県拠点。
東京都立大学在学中より本格的な登山を始める。1996年にK2 (8611m) 登頂、その後、冬期の北アルプス鍋岳で初登攀などを経て、「サバイバル登山」と自ら名付けた登山を開始。山行記「ツンドラ・サバイバル」で第5回梅棹忠夫・山と探検文学賞 (2016年)、小説「息子と狩猟に」(2017年)が31回三島由紀夫賞候補。近著に「サバイバル家族」(2020年)、書評集「You are what you read あなたは読んだものに他ならない」(2021年)など。

石川 竜一

1984年沖縄県生まれ。沖縄県拠点。
沖縄国際大学社会文化学科在学中に写真と出会う。2010年に写真家勇崎哲史に師事。2011年には、東松照明デジタル写真ワークショップに参加。第35回写真新世紀佳作 (2012年)、第40回木村伊兵衛写真賞 (2015年)。近年の展示にリボン・アートフェスティバル2019 (宮城)、「Ohマツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ビーボー」兵庫県立美術館 (2019年)、「日産アートアワード2017:ファイナリスト5名による新作展」BankART Studio NYK (神奈川) など。



石川竜一《燧の背と尾 北海道》2018、『いのちのうちがわ』より
Courtesy of the artist

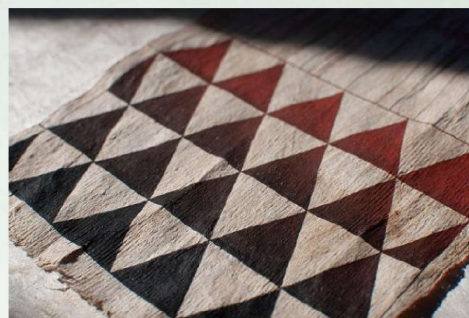
ニーカウ・ヘンデン

Nikau Hindin

1991年オークランド(タマキ・マカウラウ)、ニュージーランド(アオテアロア)生まれ。
ギズボーン(ツラランダヌイ・ア・キア)、ニュージーランド(アオテアロア)拠点。 ※ () 内はマオリ語での名称

コウモリ楮(アウテ)を打ち延ばしてできる樹皮布(パーククロス)の作り手であり、旧暦、言語、部族系図のほか、伝統的知識を継ぐ者と土地、植物、水との関係性をテーマに制作。ハワイで航海術、天測航法、現地の樹皮布カバについて学び、2018年の帰国後は百年以上途絶えていたマオリの楮布を再現した。先住民の習わしと現代アートにまたがる実践を試みる。

近年の活動に「Naadohbii」ウイニベグ美術館 (2021-2022年、カナダ)、カトマンズ・トリエンナーレ2021 (ネパール) など。個展「Kōkōrangī ki Kōkōwai」ダウズ美術館 (2020年、ニュージーランド) では、マオリ旧暦において方角だけでなく時を示す天体の動きをもとにした作品を発表。



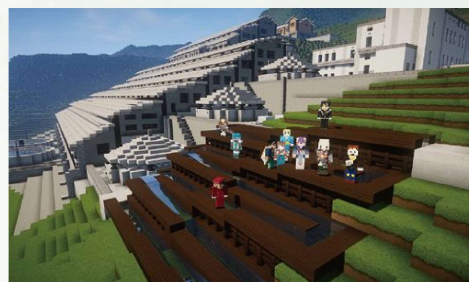
《十三夜にうかぶ牡羊座の星の新月 (Mutuwhenua. Te Ngahurumātoru o Ruahanui.)》
【部分】 2020

許家維 (シユウ・ジャウエイ)

Hsu Chia-Wei

1983年台中(台湾)生まれ。台北(台湾)拠点。

ル・フレノワ国立現代芸術スタジオ(フランス)を卒業後、アーティスト、映像作家、キュレーターとして現代アートと映像の言語を融合させ、映像制作の裏にある複雑な制作メカニズムを解き明かす作品を発表。作品を通して従来の歴史的ナラティブで見落とされ排除されてきた人間、素材、場所のつながりを紡ぎ出す。これまでに開催した個展は、Liang Gallery (2021年、台北、台湾)、「銅鐘藝術賞:熊貓、鹿、馬來貘與東印度公司」国立台北教育大学博物館 (MoNTUE) (2019年、台湾)、「MAMスクリーン009」森美術館 (2018年、東京)。「シンガポール・ビエンナーレ (2019年)」、「A Tale of Hidden Histories」アイ・フィルムミュージアム (2019年、アムステルダム、オランダ)、そして上海、光州、釜山、シドニー (2018年)のビエンナーレにも参加。さらに「台湾国際ビデオアート展」鳳甲美術館 (2018年、台北、台湾)のキュレーター、「2019 アジア・アート・ビエンナーレ」国立台湾美術館 (台中)の共同キュレーターをホー・ツーニエンと務める。



《ミネラル・クラブ》2018
Image courtesy of the artist / Provided by Hsu Chia Wei Studio

石黒 健一

Ishiguro Kenichi

1986年神奈川県生まれ。京都府及び滋賀県拠点。

歴史的テーマや物質などの土地に根差した事象を資源として扱い、それらの結節点として彫刻や映像を制作。鉱物や失われゆく技術への関心を軸に、これまで出会うことがなかった各対象が関係するようなインスタレーションを展開している。

近年の主な展示に「余の光/Light of My World」旧銀鈴ビル(2021年、京都)、「Soft Territory かかわりのあわい」滋賀県立美術館(2021年)、「Sustainable Sculpture」駒込倉庫(2020年、東京)、「本のキリヌキ」瑞雲庵(2020年、京都)などがある。また、2014年に京都と滋賀の県境に位置する「山中suplex」を共同で立ち上げ、現在も同スタジオを拠点に活動している。



《石貨の島と我が彫刻》2020
Photo:ニコラス・ロック

ミット・ジャイン

Mit Jai Inn

1960年チェンマイ(タイ)生まれ。チェンマイ(タイ)拠点。

少数民族ヨン族出身。1970~76年、パタヤのジッタパワン・カレッジで仏教を修行。1983年からバンコクのシラパコーン大学で美術専攻。1986年に渡欧、1988年ウィーン応用美術大学修士課程に入学。1988~92年、フランス・ヴェストのスタジオ・アシスタント。1992年、タイに戻り、アーティスト数名とチェンマイ・ソーシャル・インスタレーション(CMSI)を開始。第4(最終)回のCMSIで、市民参加のための「Week of Cooperative Suffering」に着手。2015年、アーティストやキュレーターがタイや東南アジアの歴史と向き合うためのカーテル・アートスペースをバンコクに設立。

個展に「Dreamworld」アイコン・ギャラリー(2021年、バーミンガム、英国)、「Color in Cave」マカン美術館(2019年、ジャカルタ、インドネシア)、グループ展に「SUNSHOWER」森美術館(2017年、東京)、第15回と21回(2012、2018年)のシドニー・ビエンナーレ(豪州)など、アーティスト主催の展覧会、美術館、ギャラリー、大規模展等で作品を発表。



《People's Wall》2019
Photo: Jim Thompson Foundation
Courtesy of the artist and Jim Thompson Foundation

ジャッキー・カルティ

Jackie Karuti

1987年ナイロビ(ケニア)生まれ。ナイロビ(ケニア)拠点。

ジャッキー・カルティは、ケニアのナイロビを拠点に活動するアーティスト。作品をHow Clouds Are Formed(雲はいかに生成されるか)というメソッド、すなわち複数の入力アングルを提供して、何かが出現する場を作り出すという作業方法で制作している。様々な場所にあるオブジェ、スベアパーツ、ムーブメントを組み合わせて、機械、地図、図面、図書カードをツールとして援用した気象・観測機器によって、地理的・社会的の気候を読み解く。2020年にヘンリケ・グローズ賞を受賞し、2021年にフォロー・フルクサス・アフター・フルクサス奨学金を獲得。彼女の実践に呼応する他のプロジェクトに、図書館プロジェクト「In The Case of Books」、オンライン・ワークスペース「I've been working on some MAGIC」がある。



展示風景 (Shapeshifting and the Impossibility of Weathered Wood) 2021
Photo: Christian Lauer
Courtesy of the artist

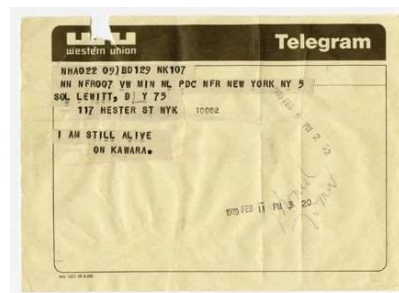
河原 温

On Kawara

1932年愛知県生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2014年、同地に没。

国際的に知られるコンセプチュアル・アーティストの一人である河原温は、「デイト・ペインティング」による《Today》シリーズ(1966-2013年)などで高い評価を得ている。一枚の絵画を一日で完成させるという自らに課したルールに従い、48年間に渡って、約3000枚の単色のキャンバスに制作当日の日付を描いた。また「I AM STILL ALIVE(いまだ生きている)」というメッセージだけが記された電報を送った《I Am Still Alive》シリーズ(1970-2000年)もよく知られている。「あいち2022」のテーマとコンセプトは、送り手も受け手も一過性の存在であることを再認識させるこのメッセージから着想を得ている。

主な個展は「河原温 連続/非連続 1963-1979」(1980-81年、国立国際美術館他)、「河原温 反復と対立」(1991年、ICA名古屋他)、「On Kawara - Silence」(2015年、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、米国)など。



ソル・ルウィットに宛てた電報。1970年2月5日
《I Am Still Alive》(1970-2000)より
LeWitt Collection, Chester, Connecticut, USA
© One Million Years Foundation

ユキ・キハラ

Yuki Kihara

1975年アピア(サモア)生まれ。アピア(サモア)拠点。

日本とサモアにルーツを持ち、領域横断的に活躍するアーティスト。ビジュアル・アート、ダンス、キュレーション活動を通して、アイデンティティ、政治、脱植民地化、エコロジー間の交差性を探り、支配的で一方的な歴史的ナラティブに疑問を投げかける。

2008年にメトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)の近現代美術部門ライラ・アチソン・ウォレス・ウイングで、彼女の芸術活動のハイライトとなる個展「Living Photographs」を開催。作品はその後、同館の収蔵品となる。

キハラ作品は、ロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)、大英博物館(ロンドン)、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)、高雄市立美術館(台湾)、ニュージーランド国立博物館テ・パバトンガレフ(ウェリントン)などに所蔵されている。第59回ヴェネチア・ビエンナーレ(2022年、イタリア)のニュージーランド代表。



《サーモアのうた (Sāmoa no uta) A Song About Sāmoa - Fanua (Land)》2020/21
Photo: Glenn Frei Courtesy of Yuki Kihara and Milford Galleries Dunedin and Queenstown, Aotearoa New Zealand

バイロン・キム

Byron Kim

1961年サンディエゴ(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

バイロン・キムはしばしば、抽象的崇高と形容されるような領域で創作を行う。彼の作品は、抽象と具象、コンセプチュアル・アートと純粋絵画のはざまに存在する。20年以上続く制作期間で1000を超える作品数となった「サンデー・ペインティング」シリーズでは、毎週の空模様を記録し、絶えず変化する、広大な宇宙とささやかなアーティストの日常を対比する。このシリーズは、河原温の《Today》シリーズにおける「デイト・ペインティング」(1966-2013年)や、ポストカードのシリーズ《I Got Up》(1968-1979年)などに大きく影響を受けたものである。

キムの作品で最も知られているのは、1993年のホイットニー・ビエンナーレに出品され、現在も制作継続中の絵画《提喻 (Synecdoche)》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー、米国に収蔵)だろう。人間の肌の色を表した何百ものパネルがグリッド上に構成され、単色の抽象画であり、集団の肖像画とも言える作品だ。



「サンデー・ペインティング、2001年1月7日～2018年2月11日」の展示風景
2018年1月5日～2月17日
Courtesy of the artist and James Cohan

岸本 清子

Kishimoto Sayako

1939年愛知県生まれ。東京都及び愛知県を拠点に活動。1988年愛知県にて没。

岸本清子は大学進学のために上京し、高校の先輩である赤瀬川原平や荒川修作とともにネオ・ダダイズム・オルガナイザー(ネオダダ)に参加。1960年代を通し前衛芸術シーンにて精力的に活動した。1979年に名古屋に帰郷してからは、愛による社会変革を説く気宇壮大な絵巻物を制作。また、それらの絵画を掲げながら、独自の世界観を訴える大胆なパフォーマンスを多数行う。これらパフォーマンスは公園や路上でもたびたび実施され、既存の美術の領域にとどまらないものであった。1988年に49歳で亡くなるが、絵画からパフォーマンスまでジャンル横断的に行われた彼女のエネルギーな表現は、今改めて注目されつつある。



《赤瀬革命第2弾》のパフォーマンス記録写真、1980
愛知県美術館蔵
Photo: 入義教四郎

小寺 良和

Kodera Yoshikazu

1957年愛知県生まれ。愛知県拠点。

小寺良和は40年近く、福祉施設で生活しながら作陶を続けている。戦争のニュース映像に強い衝撃を受けたことが発端になり、爆弾をかたどったシリーズを長年制作している。ただし、小寺の作る「バクダン」シリーズは多くの突起や穴を備え、あたかも木の根や海洋生物のような形をしている。恐ろしさ以上に不敵なユーモアを同時に感じさせる点が特徴である。1999年より特定非営利活動法人プロール会の主催する公募展「生(いのち)の芸術 フロール展」(1999年～2008年)に毎年出展。愛知県知的障害児者生活サポート協会による公募展「ふれあいアート展」(2008年～)の第8回と第9回にて名古屋社会福祉協議会会長賞、第10回に大賞を受賞する。また、「あいちアール・ブリュット展優秀作品」(2014年～)への選出も重ねている。



《バクダン》制作年不明
Photo: 城戸保

鯉江 良二

Koie Ryoji

1938年愛知県生まれ。愛知県および岐阜県を拠点に活動。2020年愛知県にて没。

生地の常滑市で土管工場でのアルバイトで初めて土に触れて以降、常滑高等学校窯業科を卒業後はタイル製造業に携わりながら陶を学び、1966年には常滑市立陶芸研究所から独立した。自分の顔をかたどった《土に還る》シリーズ(1971年)や、反核を訴えた《証言》(1973年)、《チェルノブイリ》シリーズ(1989-90年)など、社会への強いメッセージを核に据えた作品を発表した。金属やガラスなど多様な素材を用いて制作しながらも、土を炎で焼くという行為を問い直し続け、因習的な「陶芸」の枠にとどまらない活動は、国内外で高く評価されている。「現代の陶芸 I いま、土と炎で何が可能か」山口県立美術館(1982年)、「現代の陶芸 1950-1990」愛知県美術館(1993年)などをはじめとした数々の展覧会に参加。



チェルノブイリ・シリーズ
1989-1990
愛知県陶磁美術館蔵

アンドレ・コマツ

André Komatsu

1978年サンパウロ(ブラジル)生まれ。サンパウロ(ブラジル)拠点。

1990年代のブラジルの民主主義の復興と新自由主義経済の導入を間近に見つめてきたアンドレ・コマツの作品は、世界中の人々のさまざまな生き方や、都市空間や権力との向き合い方に対して疑問を投げかける。「コマツは、どこにでも潜んでいる権力や社会的葛藤に関心を抱き、彼の彫刻・インスタレーション作品のテーマの原点となっている。作品タイトルの多くはミシェル・フーコーに拠っており、フーコーの「権力の微視的物理学(microphysics of power)」の理論は、作品タイトルの域を超え、コマツの関心事と世界観の中核を成している」(ジャコポ・クリヴェリ・ヴィスコンティ、キュレーター)。

主な展覧会に「Avenida Paulista」サンパウロ美術館(2017年、ブラジル)、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ(2015年、ブラジル館、イタリア)、「Beyond the Supersquare」ブロンクス美術館(2014年、ニューヨーク、米国)など。



《FANTASMA #7》2017
Photo: Zhang Kai
Courtesy of Galleria Continua

アブドゥライ・コナテ

Abdoulaye Konaté

1953年ティレ園(マリ)生まれ。ノバコ(マリ)拠点。

故郷のマリ共和国や世界各国から集めた衣服を用いた大型のテキスタイル・インスタレーションを制作するアーティスト。抽象性と具象性を併せ持つその作品は、美しさを探求しながら社会・政治・環境などの多様な問題にも言及する。

織物を「コミュニケーション手段」とする西アフリカの伝統を参照しつつ、地球規模の問題と自らの生活や国といった身近な事例のバランスをとるコナテは、戦争、権力闘争、宗教、グローバル化、生態系の変化、エイズなどの様々な要因が、社会や個人にどのように影響してきたかを問いかける。

第57回ヴェネチア・ビエンナーレ(2017年、イタリア)、ドクメンタ12(2007年、カッセル、ドイツ)などの国際展の他、アルケン近代美術館(2016年、コペンハーゲン、デンマーク)での個展、スミノニアン協会国立アフリカ美術館(2015年、ワシントンD.C.、米国)、ボンビドゥール・センター(2007年、パリ、フランス)、森美術館(2007年、東京)でのグループ展などに参加。



《祖国の子供たちのための風》2019
Courtesy of the artist, Primo Marella Gallery and STANDING PINE

近藤 亜樹

Kondo Aki

1987年北海道生まれ。山形県拠点。

東北芸術工科大学大学院を修了後、国内外の展覧会に多数参加。躍動感あふれる筆遣いと力強い色彩の絵画作品とともに、油絵アニメーションと実写による短編映画「HIKARI」(2015年)や、パークホテル東京の客室に描いた「おたふくルーム」(2015年)の制作、音楽家とのライブペインティングなど、形式にとらわれない活動で注目される。2021年3月、初作品集「ここにあるしあわせ」(T&M Projects)を刊行。2022年の「VOCA展」(上野の森美術館、東京)に選出。

主な展覧会に「近藤亜樹一星、光る」山形美術館(2021年、山形)、作品集刊行記念展「ここにあるしあわせ」シュウゴアーツ/フィリップス東京/現代芸術振興財団/代官山葛屋書店(2021年、東京)、「高松市美術館コレクション+ 身体とムービング」高松市美術館(2020年、香川)など。



《星、光る》2021
Photo: 奥山茂俊 © Aki Kondo, Courtesy of ShugoArts

小杉 大介

Daisuke Kosugi

1984年東京都生まれ。オスロ(ノルウェー)拠点。

小杉は、オスロ芸術大学卒業後、映像作品を中心に、彫刻、インスタレーション、パフォーマンスやテキストなどを通じて、社会を制御する制度や規律の中で揺れ動く個の主体性を探求してきた。身体的または精神的痛みの伝達可能性を問う彼の作品は、物語の描写や、感情移入を促すような表現からは慎重に距離をおく。小杉の作品を構成する、記憶と現実と想像の境界を揺るがすかのような風景は、個が生きている時間や空間に接近し、到達することのない内的領域の存在を示唆する。

近年の主な個展にジユド・ボーム国立美術館(2019年、パリ、フランス)、国際展には光州ビエンナーレ(2016年、韓国)など。国内では2021年に東京都現代美術館の「MOTアニュアル2021 海、リビングルーム、頭蓋骨」にて紹介された。



《グッドネーム(ヘッドフリーズ)》2017
Photo: Kjell Ove Stovvik/LIAP 2017
Courtesy of the artist

黒田 大スケ

Kuroda Daisuke

1982年京都府生まれ。京都府拠点。

様々なリサーチを通じて、社会の中に佇み忘れられ無視された幽霊のような存在を見出しビデオやインスタレーションとして姿を与えるような作品をつくる。近年は自らが長く学び、制作の拠り所としてきた「彫刻」について、各地でリサーチを進めその再解釈を試みている。

主な個展に「未然のライシテ、どげざの目線」京都芸術センター(2021年)、「ハイパーゴースト・スカulptチャー」Kanzan Gallery(2019年、東京)、「不在の彫刻史2」3331 Arts Chiyoda(2019年、東京)。グループ展に「対馬アートファンタジア2020-21」対馬市内各所(2021年、長崎)、「本のキリヌキ」瑞雲庵(2020年、京都)、「瀬戸内国際芸術祭2016」小豆島(香川)など。



《ドグマのためのプラクティス》2020

グレンダ・レオン

Glenda León

1976年ハバナ(キューバ)生まれ。マドリッド(スペイン)拠点。

レオンの作品群は、多分野に渡る学際的知見と精神的探求により形成される。幼少期からダンスや振付に興味を持つレオンは、心、身体、空間、音や静寂で構成される「全体」への理解を深め、美術史を学ぶことでさらに自身の興味を深化、拡張してきた。ケルン・メディア芸術大学ニュー・メディア科修士課程のなかで、メディアムや素材の幅を広げ、実験的な表現を確立。自然の摂理を可視化させること、あるいは進化の過程に必須と位置付ける「聴く」行為に着目して人々の世界への認識を覆す作品は、世界各地の美術館に収蔵されている。

近年では、ビーゴ現代美術館で個展「Música de las formas」(2021年、スペイン)を開催。第55回ヴェネチア・ビエンナーレ(キューバ代表、2011年、イタリア)に参加。



《コンクリート・ミュージック(Música concreta)》2015
Installation view in 「Centro de Desarrollo de las Artes Visuales (CDAV)」
第12回ハバナ・ビエンナーレ、2015
Courtesy of Estudio Glenda León

タニヤ・ルキン・リンクレイター

Tanya Lukin Linklater

1976年コディアック(米国)生まれ。ノースベイ(カナダ)拠点。

タニヤ・ルキン・リンクレイターは、パフォーマンス、写真、映像、インスタレーション、テキストなど、先住民の暮らし、土地、生計の歴史を主軸に置いた作品を発表している。展示品、楽譜、先祖代々の持ち物に関連した彼女のパフォーマンスは、彼女の言う「感じられた構造」を生み出し、作品のコンセプトとその実践を執拗に探求している。

主な展覧会にニュー・ミュージアム・トライエンニアル(2021年、ニューヨーク、米国)、サンフランシスコ近代美術館(米国)、シカゴ・ビエンナーレ国際建築展(2019年、米国)、EFAプロジェクト・スペース+パフォーマンス(ニューヨーク、米国)、アートギャラリー・オブ・オンタリオ(トロント、カナダ)、リマイ・モダン(サスカトゥーン、カナダ)など。2020年、初の詩集『Slow Scrape』を発表。受賞歴にHerb Alpert Award in the Arts for Visual Art(2021年、米国)。アラスカ南西部の先住民民族アリュティック人として、同地方のコディアック島で生まれ育つ。



《たくさんの方から生まれる増幅》2019
Courtesy of the artist and Catriona Jeffries

ニヤカロ・マレケ

Nyakallo Maleke

1993年ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。ヨハネスブルグ(南アフリカ)拠点。

ニヤカロ・マレケは、ヨハネスブルグを拠点に活動するアーティスト兼文筆家。空間、動き、そして歩くことを語る手段として「拡張されたドローイング」の概念に基づいて活動する。マレケのドローイングはメディウム、技法、分野などを超越し、インスタレーション、パフォーマンス、サウンドピース、プリント、彫刻などの形で発表されている。近作では物質性を重視し、従来のドローイングのメディウムと、刺繍を想起させる緻密なステッチやワックスペーパーなど異質な素材との組み合わせが多くみられる。

バレー美術大学(スイス)修士課程にて公共空間表現を専攻し、ドローイングを媒体に移民、脆弱性、公共空間についての論究を深め、2019年同課程を優秀な成績で修了。2015年ウィットウォーターズランド大学(南アフリカ)卒業。NGO(ヨハネスブルグ、南アフリカ)、ステイブソン(ケープタウン、南アフリカ)、Modzi Arts Gallery(ルサカ、ザンビア)などでのグループ展に参加。



《Enclosed》2020
Photo: Andrew Wessels
Courtesy of the artist

ミシェック・マサンヴ

Misheck Masamvu

1980年ベンハロンガ(ジンバブエ)生まれ。ハラレ(ジンバブエ)拠点。

主に画家・彫刻家として活動するミシェック・マサンヴは、自身の作品を抽象と具象の間で揺れる「ミュータント(突然変異体)」と表現する。その活動は、政府によるイデオロギー統制や人間性の追求の破綻に対する闘争である。存在の証として捉えられるその作品群は、彼の実体験をそのまま提示するだけでなく、精神的な空間をも指し示す。キャンバスに重ねられた絵具の層や筆跡がこれまでの葛藤や決断に向き合うよう促すのだ。

近年は、個展「Talk to me while I'm eating」/グッドマン・ギャラリー・ロンドン(2021年、英国)、「Allied with Power」/ベレス・アート・ミュージアム・マイアミ(2020年、米国)、第22回シドニー・ビエンナーレ(2020年、豪州)に参加。その他、第54回ヴェネチア・ビエンナーレ(ジンバブエ代表、2011年、イタリア)など。



《Still Still》2012 - 現在
Courtesy of the artist and Goodman Gallery (Cape Town, Johannesburg, London)

升山 和明

Masuyama Kazuaki

1967年岐阜県生まれ。愛知県拠点。

升山和明はカラフルなコラージュ作品で注目を集めているアーティスト。愛知県の犬山市にかつてあったデパート「清水屋」の外観が主なモチーフであり、作品の多くがこのデパートの外観とタクシー、そして自身の名前でしめられている。周囲のサポートのもと、モチーフを描く、切り抜く、貼る、さらに描くと言う複雑なプロセスを経て作られた作品は、多彩な色と質感にあふれており、デパートや車のイメージが自在に浮遊する中で遊ぶかの様である。愛知県で開催されている「あいちアールブリュット展」や「ふれあいアート展」などの公募展への出展を重ね、「第59回小牧市民美術展」にて市議会議長賞(2018年)を受賞。「アール・ブリュット -日本人と自然- in 東海・北陸ブロック」ミューゼ雪小町(2020年、新潟)に参加。



《SHIMIZUYA TAXI 2》2017
Photo: 林育正

バリー・マッギー

Barry McGee

1966年サンフランシスコ(米国)生まれ。サンフランシスコ(米国)拠点。

サンフランシスコ芸術大学の絵画・版画専攻卒業。アーバン・リアリズム、グラフィティ、アメリカン・フォーク・アートの影響を主に受けた社会的なムーブメント「ミッション・スクール」と関わる。作品はいずれも、現代社会に対する率直で本質を捉える観察力で制作され、「ツイスト」(グラフィティ用の署名)時代から世界的アーティストとなった現在に至るまで、社会の周縁にあるコミュニティに能動的に貢献するという目的が一貫している。

個展をブラダ財団(ミラノ、イタリア)、ハマー美術館(ロサンゼルス、米国)、カリフォルニア大学バークレー美術館&パシフィック・フィルム・アーカイブ(米国)、ボストン現代美術館(米国)、フォートワース近代美術館(テキサス州、米国)、ワタリウム美術館(東京)、サンタバーバラ現代美術館(カリフォルニア州、米国)で開催。



リボーンアート・フェスティバル2019(宮城県)の展示風景
Photo: Nori Ushio
© Barry McGee; Courtesy of the artist, Perrotin, and Reborn Art Festival

ミルク倉庫+ココナッツ

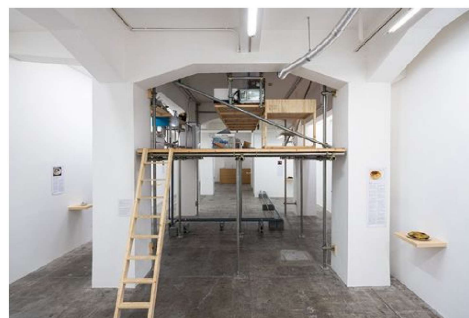
mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

2015年東京都結成。東京都拠点。

メンバー：宮崎直孝(1974年-)、松本直樹(1982年-)、坂川弘太(1976年-)、篠崎英介(1980年-)、西浜琢磨(1978年-)、田中丸善一(1984年-)、瀧口博昭(1974-2016年)

2009年に結成したミルク倉庫に、2015年よりアーティストユニットのココナッツが加わり、7名でミルク倉庫+ココナッツとして活動。メンバーそれぞれが、建築系技術をはじめとして、電設技術、音楽、エディトリアルデザインなどの専門的スキルを有し、自ら、共同のアトリエや、展示・イベントスペース/住居として「milkyeast」(2011-2016年)の改修や改装を行い運用する。ものに備わる潜在的な機能の発見や、道具と身体の間から着想された作品を特徴とし、各地で展示やイベントなども企画する。

主な展覧会に「タイムライン 時間に触れるためのいくつかの方法」京都大学総合博物館(2019年)、「東京計画2019 vol.4 ミルク倉庫+ココナッツ scratch tonguetable」gallery aM(2019年、東京)などがある。



(scratch tonguetable) 2019
「東京計画2019 vol.4 ミルク倉庫+ココナッツ scratch tonguetable」
gallery aM(企画:森前知子) Photo: 森田兼次

三輪 美津子

Miwa Mitsuko

1958年愛知県生まれ。愛知県拠点。

アイデンティティというある種の呪縛からの解放を願って初期の頃から常に作品のスタイルを変えようという方法を選択、現在に至る。「見る行為」そのものを浮かび上がらせたいという思いから、作り手である以上に完成した作品を最初に見る人間であるという立ち位置を意識した制作を行なっている。

1996-1997年フィリップ・モリス財団の奨学金によりクンストラーハウス・ベタニエン(ベルリン、ドイツ)に滞在、1998年IASPISのゲスト・アーティスト(ストックホルム、スウェーデン)。主な個展にロングハウス・プロジェクト(2014年、ニューヨーク、米国)、ギャラリーHAM(2009年、愛知)、グループ展に「消失点-日本の現代美術展」(2007年、国立近代美術館、ニューデリー/プロジェクト88、ムンバイ、インド)など。



(STATUE(彫像)No.4) 2009 名古屋美術館寄託
Photo: Keizo Kioku Courtesy of the artist

宮田 明日鹿

Miyata Asuka

1985年愛知県生まれ。三重県拠点。

ニット、テキスタイル、手芸などの技法で作品を制作。自分や他人の記憶を用いて新たな物語を立ち上げ、顧みることなく継承されてきた慣習や風習に疑問を投げかけている。近年では、手芸文化を通して様々なまちの人とコミュニティを形成するプロジェクトを各地で継続している。おしゃべりしながら編む手を動かし、様々な世代が学び合い、何気ない会話を交わすなかで、見過ごされてきた出来事や家のなかの事柄も社会と密接につながっていることを参加者自身が再認識する作業を試みている。

近年の活動には「名古屋×ベナン同時開催展:名古屋文化発信局」Minatomachi POTLUCK BUILDING(2021年、愛知)、「金石手芸部」金沢21世紀美術館主催「自治区 金石大野アートプロジェクト『かないわ楽座』」金石地区(2021年、石川)、「織り目の在りか 現代美術 in 一宮」旧林家住宅(2018年、愛知)、「港まち手芸部」(2017年-進行中、愛知)など。



「こんにちは」港まち手芸部です。Vol.4」2021
Photo: 三浦和也
Courtesy of 港まちづくり協議会

モハンマド・サーミ

Mohammed Sami

1984年バグダッド(イラク)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

モハンマド・サーミは、2005年までインスティテュート・オブ・ファインアーツ(バグダッド、イラク)で絵画を専攻。2007年にスウェーデンに移住。2015年には、アルスター大学ベルファスト校芸術学部(北アイルランド、英国)で優等学位を取得。2018年にはロンドン大学ゴールドスミス校(英国)にて、美術学修士を取得した。

モハンマド・サーミは、紛争や暴力の持つ過激なイメージに対抗する寓意的な表現としての絵画に取り組む。彼の絵画は、日常のものやありふれたものから想起される在りし日の記憶、つまり故郷のイラクから難民としてスウェーデンに移住してきたときの記憶を辿ろうとするものである。



(難民キャンプ) 2020
Courtesy of the artist and Modern Art, London

百瀬 文

Momose Aya

1988年東京都生まれ。東京都拠点。

映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複層性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を扱いながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。

主な個展に「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」EFAG East Factory Art Gallery(2020年、東京)、「サンプルボイス」横浜美術館アートギャラリー1(2014年、神奈川県)、グループ展に「彼女たちは歌う」東京藝術大学大学美術館陳列館(2020年)、「六本木クロッシング2016展」森美術館(東京)、「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(2015年、国立新美術館、東京/2016年、韓国国立現代美術館、果川)など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨークに滞在。



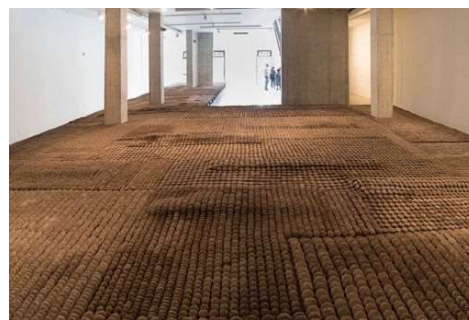
《Jokanaan》2019
愛知県美術館蔵

デルシー・モレロス

Delcy Morelos

1967年コルドバ(コロンビア)生まれ。ボゴタ(コロンビア)在住。

幼少期に過ごしたコロンビア北部のティエララタで、内戦による暴力と薬物の横行を目の当たりにする。同時に、先住民出身の父方の祖母から、植栽や土に関わる仕事について学ぶ。暴力に常に晒される緊迫したなかで、感情表現ができる場所や、人間と環境との関わりを探求。作品では、土やハチミツ、シナモンなどの天然由来の材料で、祖先の宇宙観、死生観をつむぐ。絵画、彫刻、インスタレーションで構成される作品を大地や天然素材の可能性を提示する「子宮」のような空間であると考えている。主な展示に現代アートギャラリーのRöda Sten Konsthall(2018年、ヨーテボリ、スウェーデン)やNC arte(2018年、ボゴタ、コロンビア)がある。2023年秋にディア・チェルシー(ニューヨーク、米国)で新プロジェクトの展示予定。



《大亀(Enie)ーウイト族の言葉でー》2018
Photo: Ernesto Monsalve
Courtesy of the artist

迎 英里子

Mukai Eriko

1990年兵庫県生まれ。秋田県拠点。

屠畜や石油の採掘、国債の仕組みや水蒸気の循環など、不可視のシステムをモチーフとしたパフォーマンスを制作している。素材の物質性を強く受け取れる状態を彫刻と考え、モチーフとしたシステムのメカニズムを等身大の装置へ変換し、動作させる。抽象化された行為への推測と身体感覚を横断しながら対象へたどり着く場所をつくり出す。主な展示会に「ARTS & ROUTES-あわいをたどる旅-」秋田県立近代美術館(2020年)、「不純物と免疫」トーキョーアーツアンドスペース本郷(2017年)、「新しいループ・ゴールドバーグ・マシーン」(2016年、KAYOKOYUKI/駒込倉庫、東京)など。



《アプローチ 6.1》2020
Photo: 草野 裕

奈良 美智

Nara Yoshitomo

1959年青森県生まれ。栃木県拠点。

愛知県立芸術大学で絵画を学び、同大学院卒業後は、12年間ドイツを拠点に制作。1990年代半以降からヨーロッパ、アメリカ、日本、そしてアジアの各地で規模に関わらず様々な場所で展示発表を続ける。見つめ返すような印象的な絵画、日々自由に描き続けるドローイング作品のほか、木、FRP、陶、ブロンズ、そしてインスタレーションなど多様な素材や空間に生命を吹き込む様な彫刻作品を制作。また、制作の日々や旅先での出会いを収めた写真作品も発表している。

作品はニューヨーク近代美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、ボストン美術館、ナショナルギャラリー(ワシントンD.C.)、大英博物館(ロンドン)など世界中の美術館に所蔵されている。



《Fountain of Life》2001/2014
「奈良美智 for better or worse」豊田市美術館、2017
©Yoshitomo Nara Photo: Mie Morimoto

トゥアン・アンドリュウ・グエン

Tuan Andrew Nguyen

1976年サイゴン(ベトナム)生まれ。ホーチミン市(ベトナム)拠点。

カウンターメモリー(国家やマスメディアにおける「正史」に相反する記憶)やポストメモリー(社会的トラウマにおける当事者の子孫たちが生きていくなかでさらに広がっていく事後記憶)によって行われる政治的抵抗の方法を探求するアーティスト。史実や超自然現象から物語を抽出し、再構築することで行われる映像や彫刻作品は、事実とフィクションのどちらもが同等の重要性を持つ。

近年の発表歴にマニフェスタ13(2020年、マルセイユ、フランス)、シャルジャ建築トリエンナーレ(2019年、アラブ首長国連邦)、「SOFT POWER」サンフランシスコ近代美術館(2019年)、シャルジャ・ビエンナーレ2019、ホイットニー・ビエンナーレ2017(米国)など。カレ・ダール(ニーム、フランス)、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)、サンフランシスコ近代美術館、ニューヨーク近代美術館、ソロモン・R・グッゲンハイム美術館、ホイットニー美術館など作品収蔵多数。



《ザ・ボート・ピープル》2020
© Tuan Andrew Nguyen 2022
Courtesy of the artist and James Cohan, New York.

尾花 賢一

Obana Kenichi

1981年群馬県生まれ。秋田県拠点。

人々の営みや、伝承、土地の風景や歴史から生成したドローイングや彫刻を制作。虚構と現実を往来しながら物語を体感していく作品を探求している。近年の主な展示に「200年をたがやす」秋田市文化創造館(2021年)、「奥能登国際芸術祭2020+」(2021年、石川)、「VOCA展2021」上野の森美術館(2021年、東京)、「表現の生態系」アーツ前橋(2019年、群馬)など。また、「VOCA展2021」ではVOCA賞を受賞。



《上野山コスモロジー》2021
Photo: 上野剛史

大泉 和文

Oizumi Kazufumi

1964年宮城県生まれ。愛知県拠点。

1991年以降、アンビルト建築の三次元CGによる再現と併行して、オートマティック・ドローイング・マシンおよび大規模なインタラクティブ・インスタレーション作品を制作してきた。その特徴は、展示空間に応じた仮設の通路やステージを設置し、観客に空間体験を誘発する点、そして一連のドローイング・マシンに見られるように、作品要素が物理的に動く点である。また、美的センスに基づく設計と、自らアルミやアクリルを機械加工するディテールも大泉の作品を特徴づけている。近年の主な個展はStanding Pine(2020年、愛知)、N-Mark 5G(2019年/2018年、愛知)にて開催。その他にアルスエレクトロニカ・フェスティバル2019(リンツ、オーストリア)、神戸ビエンナーレ2007(兵庫)への参加など。



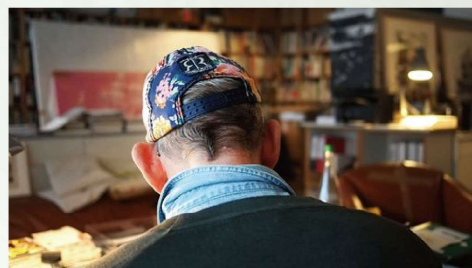
《可動橋/BH 2.0》2019
Courtesy of the artist

奥村 雄樹

Okumura Yuki

1978年青森県生まれ。ブリュッセル(ベルギー)及びマーストリヒト(オランダ)拠点。

翻訳者の特殊な主体性に触発されつつ異なるアーティストたち(しばしば奥村自身を含む)の作品及び人生を結ぶことでその重なりと隔たりから世界的本質的な平行性と意識の根源的な相互連結性を探究している。近年は自身のパーソナリティを極限まで削減しようと試みた60-70年代のコンセプチュアル・アーティストたちの方法論に「身体的自己」の表出と「自他合一」への志向性を感知しながら遠い時空から響く彼女らの声に耳を傾けている。主なプロジェクトに《孤高のキュレーター》(2021年)、《彼方の男》(2019年)、《帰ってきたゴードン・マッククラーク》(2017年)、《奥村雄樹による高橋尚愛》(2016年)、《グリニッジの光りを離れて——河名温編》(2016年)などがある。



《彼方の男》2019
Courtesy of MISAKO & ROSEN, Tokyo and LA MAISON DE RENDEZ-VOUS, Brussels

ローマン・オンダック

Roman Ondak

1966年シリナ(スロバキア)生まれ。プラチスラヴァ(スロバキア)拠点。

ローマン・オンダックがつくり出す空間では、日常の様々な出来事が人類学的調査のように配置され、普段は意識することのない日々のルールや社会に対する違和感が示される。彼にとって空間とは、物質的な存在に限られず、社会的な規範、区分、規制、そして人々の理解や認識によって形成されるものだという。客観的でも同時的でもないわたしたちの知覚は常に、知識、感情、興味に浸され、とりわけ記憶の影響を大きく受ける。すなわち空間は静的ではなく、動的な時間を通して定義され、本質的には物理的な存在にとどまらない時間的なものとなる。その空間は常に時間の中に存在し、変化や変容を経て、記憶そのものが空間固有のアイデンティティを構築する。オンダック作品の多くは、そのような流動的な時間や記憶という視点を交え、空間そのものを扱っている。



《事象の地平線(Event Horizon)》2016
オールボー近代美術館蔵 Photo: Andy Keate
Courtesy of the artist and Kunsten Museum of Modern Art Aalborg

小野澤 峻

Onozawa Shun

1996年群馬県生まれ。東京都拠点。

群馬県立前橋高等学校卒業。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。ジャグリングパフォーマンスの感覚を切り口として、文化や地域を超えた身体や意識の深いところにある、根源的な好奇心を刺激する現象を追求している。

主な展覧会に「Sense Island -感覚の島- 暗闇の美術島」(2022年、神奈川)、「Media Ambition Tokyo」渋谷スクランブルスクエア(2020年、東京)／森アーツセンターギャラリー(2021年、東京)、「Smart Illumination Yokohama」象の鼻テラス(2019年、神奈川)、「技藝フェス tech×art festival」100BANCH(2019年、東京)など。



《演ずる流形》2021

ガブリエル・オロスコ

Gabriel Orozco

1962年ベラクルス(メキシコ)生まれ。東京/メキシコシティ(メキシコ)拠点。

ガブリエル・オロスコは、60年代と70年代の壁画、写真、政治文学と関わりのあるメキシコの左派的な文化環境で育った。90年代初めにドローイング、写真、彫刻、インスタレーションによって、そして後に絵画においても評価を得た。彼の作品は、アートと日常との境界をあいまいにしつつ、複雑な幾何学と有機的な素材や偶然の要素とのバランスをとるものであることが多い。

2009年から2011年にかけてニューヨーク近代美術館(米国)、バーゼル市立美術館(スイス)、ボンビドゥー・センター(パリ、フランス)、テート・モダン(ロンドン、英国)を巡回した回顧展を含め、幅広く展覧会を開催。最近では、アスペン美術館(2016年、コロラド、米国)、東京都現代美術館(2015年、日本)でも作品を展示。2019年、メキシコ大統領は、メキシコシティのチャプルテペック公園内に文化センターを新設するにあたり、オロスコが文化事務局と共同で建設の監督にあたりと発表した。



《Roto Shaku 26》2015
Photo: Cathy Carver
Courtesy of the Artist and Marian Goodman Gallery

カズ・オオシロ

Kaz Oshiro

1967年沖縄県生まれ。ロサンゼルス(米国)拠点。

高校卒業後ロサンゼルスに渡り、カリフォルニア州立大学で1998年と2002年にそれぞれ文学士と美術学修士を取得。ポップアートやミニマリズム、抽象的表現主義などを参考にしながら、それらの思想を独自に展開し、立体と平面、抽象と具象、リアリティとイリュージョンなど、さまざまな二項対立の上に立って、「絵画」と「芸術」の本質を探っている。トロンブルイユ(だまし絵)のテクニックを用い、キャビネット、スーツケース、アンブ、鉄骨などをキャンバスで忠実に再現し、観る者を惑わせながらも魅了する。国内外で精力的に展示を続けており、2014年にはロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)で個展「Chasing Ghosts」も開催された。



《ネレンジスビーカーキャビネットとグレースケールボックス》2009
Photo: Naohiro Utagawa
Courtesy of MAKI Gallery

ティエリー・ウッス

Thierry Oussou

1988年アラダ(ベナン)生まれ。アムステルダム(オランダ)拠点。

ティエリー・ウッスは、近年、ヴィジュアル・コンセプチュアル・アーティストとしてプロジェクト「インボッシブル・イズ・ナッシング」の制作を行った。プロジェクトの核となったダホメ王国(現ベナン共和国)最後の王となったベハンジン王(1845-1906年)の玉座からは、王の地位と同時に19世紀末に植民地勢力が王国を滅ぼした経緯を読み取ることができる。ここでは玉座は権力の象徴として使われ、文化遺産を利用したり所有したりする権利に疑問を投げ、文化財から派生する工芸技術や学問の意味についても問いかける。

本展では、アフリカ最大の綿花生産国であるベナンの綿花生産をテーマにしたプロジェクト「イクイビリアム・ウインド(均衡の風)」を発表予定。綿花プランテーションに手作業に従事する労働者たちに光を当てることで、アフリカの工業化について問題提起し、奴隷貿易の歴史を辿りながら、かつて奴隷たちから土地を奪った行為が現代社会に与えている影響を視覚的に提示する。



《真っ白な金塊》「イクイビリアム・ウインド(均衡の風)」プロジェクト、2021
Courtesy of the artist

リタ・ポンセ・デ・レオン

Rita Ponce de León

1982年リマ(ペルー)生まれ。メキシコシティ(メキシコ)拠点。

ポンセ・デ・レオンは、アルゼンチンの活動団体リオ・アビエルトで身体と心の気づきについて学び、実践は状況にかかわる手段であり、アートや学習プロセスを通じて人と豊かな結びつきが生まれると考える。日本の前衛舞踊である暗黒舞踏など、身体性を知識や知恵の起源とする多様なワークショップを行い、身体の動きや他者との学びの経験をドローイングに凝縮し、ビジュアル・エッセイとして自身の思考を共有する。

第32回サンパウロ・ビエンナーレ(2016年、ブラジル)、クンストハレ・パーゼル(2014年、スイス)、80M2 Livia Benavides Gallery(リマ、ペルー)、メキシコ近代美術館(メキシコシティ)など展示多数。

現在はタニア・ソモノフ(振付師)、Vacaciones de Trabajo(自己学習プロジェクト)、新納新之助(詩人)、ヤスキ・メルチー(詩人)、エスパルタ&横尾咲子(舞踏家、紙芝居師)との共同プロジェクトなどに取り組む。



《知り合うことのないまま、ただひたすら続ける(Sin conocernos, sencillamente seguimos)》2018
Photo: Juan Pablo Murrugarra
Courtesy of 80M2 Livia Benavides Gallery, Lima, Peru

プリンツ・ゴラーム

Prinz Gholam

2001年コラボレーションを開始。ベルリン(ドイツ)拠点。

ヴォルフガング・プリンツ 1969年ロトキルヒ(ドイツ)生まれ。/ミシェル・ゴラーム 1963年ペイルート(レバノン)生まれ。

ヴォルフガング・プリンツとミシェル・ゴラームによるアーティスト・デュオ。2001年より活動を始め、身体表現と共同作業を基盤にライブ・パフォーマンスやビデオ、ドローイング、オブジェ、写真、テキストによるインスタレーションを発表。文化の規範とこの世界との間で、自己と身体を再び呼び起こし、配置し、調整することを現在進行形で試みる。

作品は文化的な枠組みの下で、意識的かつ意図的にその姿を顕在化させる。パフォーマンスでは、二人による現代人の身体動作を通して、精神と身体の問題を提起。また、双方の異なる文化を背景に、年齢、個性、教育、社会的背景や地理的出自にまつわる問いも投げかける。

主な発表歴として、マックタイオ(2021年、ローマ、イタリア)、ドクメンタ14(2017年、アテネ、ギリシャ/カッセル、ドイツ)などがある。



《時代の精神 L'esprit de notre temps(サンクトロデル・ブラジール通り、ローマ)》2021
© Prinz Gholam

ジミー・ロバール

Jimmy Robert

1975年グアドループ(フランス)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

人種やジェンダーを読み解く独自の手法で前衛パフォーマンスを再構築し、傍観者のポリティクスを探究する。2000年代初頭から黒人の身体のアイデンティティと表象を中心に据え、自身の身体と声を用い、文章、詩、ダンス、動き、イメージを織り交ぜたインスタレーションを発表。

ゴールドスミス校(ロンドン)とライクスアカデミー(アムステルダム)にて視覚芸術を学ぶ。主な展示にWIELS(ベルギー)、パレ・ド・トーキョー(フランス)、横浜トリエンナーレ(2008年)。近年はクンストヴェルケ現代美術センター(2019年、ドイツ)、Mミュージアム(2015年、ベルギー)、ザ・パワー・プラント(2013年、カナダ)、シカゴ現代美術館(2012年、米国)、ジュ・ド・ボーム美術館(2012年、フランス)、現代美術センターCCA北九州(2009年)で発表。2020年、ノッティンガム・コンテンポラリー(英国)にて個展開催後、2021年にムゼイオン近現代美術館(イタリア)、ORAS Occitane(フランス)に巡回。



《反復》2010
Collection of Centre National des Arts Plastiques, France
Courtesy of the artist; Stüger Van Doesburg, Amsterdam; and Tanya Leighton, Berlin and Los Angeles.

フロレンシア・サディール

Florencia Sadir

1991年サン・ミゲル・デ・トゥクマン<トゥクマン>(アルゼンチン)生まれ。カファヤテ、サルタ(アルゼンチン)拠点。

アルゼンチン(サルタ、カファヤテ)出身。アルゼンチンのトゥクマン国立大学にて造形芸術を学ぶ。トルクアト・デイ・テラ大学(ブエノスアイレス)でアーティスト・プログラム(2020-2021年)、フローラ・アルス+ナトゥーラ・スクール(ボゴタ、コロンビア)でスタディ・プログラムを修了。

サディールは、活動と生活拠点にしている地元のカルチャキエス渓谷との対話や継承されてきた知恵、培われてきたコミュニティを作品の題材にしている。インスタレーションや彫刻、ドローイングは、さまざまな建設用の粘土から、実用性を削ぎ落した籠細工のオブジェに使われる多様な植物繊維に至るまで、すべて自然素材によってつくられており、生産と労働と消費がライフサイクルから切り離されてしまった現代に内省を促し、人間と自然の解離という誤った理解を正すよう見る者に問いかける。アルゼンチン、チリおよびコロンビアのさまざまな公立美術館およびプライベート・コレクションに作品が所蔵されている。



《赤を歩く(Caminar sobre lo rojo)》2021

真田 岳彦

Sanada Takehiko

1962年東京都生まれ。東京都拠点。

ISSEY MIYAKEでデザインを学び、渡英、彫刻家リチャード・ディーコンにアートを学び独立。北極圏グリーンランドに滞在した30歳の時「或る狩人の死」と遭遇した体験から、「生命・存在とはなにか」という根源的問いと向き合う。以来、繊維を媒体にした造形作品を国内外ギャラリー、美術館に出品。同時に繊維研究者として各地の伝統繊維、先端繊維の調査を行い日本の繊維文化、歴史に光を当て、自治体や繊維関連企業とのプロジェクト、繊維を通じた教育、防災など社会支援企画を開催。

主な活動は、日本最古の布を再興する越後の「アングンプロジェクト」(2002年-)、日本各地で棉栽培から作品制作までを行う「コットンプロジェクト」(2008年-)など。



《内蔵する者の為(ないひするもののために)》2018

ファニー・サニン

Fanny Sanín

1938年ボゴタ(コロンビア)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

コロンビアの傑出した抽象画家で、過去50年で重要な芸術家の一人だとされる。ロス・アンデス大学(1960年卒業、コロンビア)で非具象に目覚める。イリノイ大学を経て、1963年にメキシコに移り、最初の展覧会(1964年、モンテレイ/1965年、メキシコシティ)と最初の美術館展を開催(1965年、ボゴタ)。ロンドンでの生活(1966年)が作品をより抽象化させる。ニューヨーク近代美術館の巡回展「The Art of the Real」(1968年、パリ、フランス)で幾何学的な作風を確立。1971年からニューヨーク在住。ヒューストン美術館、ニューヨーク大学IFA、スミソニアン・アメリカ美術館、ワシントン国立女性美術館、ロサンゼルス郡美術館、パークレー美術館、コロンビア国立美術館、ボゴタ近代美術館、メキシコ近代美術館など、米国、南米、欧州の美術館が作品を所蔵。2019年に作品集「ファニー・サニン：色と構造の具体的な言語」を出版。



《アクリル No.1》2021
Courtesy of the artist

笹本 晃

Sasamoto Aki

1980年神奈川県生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

ニューヨーク在住。10代で渡英、その後米国にて美術、ダンス、彫刻等を学ぶ。個人の心理状況やパーソナリティの表徴としての癖や習慣に興味を抱くようになり、以後、日常的な行為や手順をテーマにしたパフォーマンス、彫刻、インスタレーションを発表している。ビジュアルアーティストやミュージシャン、振付師、科学者、学者等幅広い分野の人間とのコラボレーションも多数展開し、自他の作品の中で笹本はダンサー、彫刻家、ディレクターとして様々な役割を演じる。現在イェール大学の彫刻科で教鞭をとっている。

主な展覧会歴には「Delicate Cycle」(スカルプチャーセンター(2016年、ニューヨーク、米国)での個展、「開館40周年展 トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」(国立国際美術館(2018年、大阪)、ホイットニー・ビエンナーレ2010(ホイットニー美術館、ニューヨーク、米国)など。



《ランダム・メモ・ランダム(random memo random)》2017
© Aki Sasamoto
Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

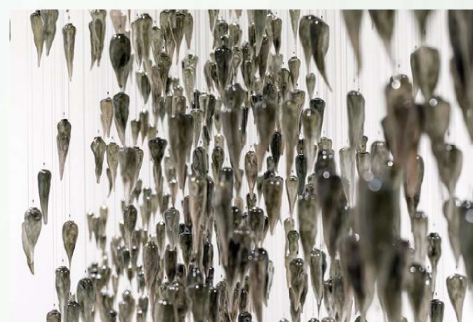
イワニ・スペース

Yhonnie Scarce

1973年ウーメラ(豪州)生まれ。メルボルン(豪州)拠点。

豪州の先住民アボリジニーのコカクとスクスに出自をもつスペースの領域横断的な創造活動は、ガラスや写真が内包する政治性と芸術性を探求する。作品ではアボリジニーの人々が植民地化政策のもとで長らく被ってきた影響を扱う。なかでも、居住地からの強制移住や移転、家族から強制隔離された児童について言及。一族の歴史を軸に据えた作品は、祖先の力を借りながら、自らがパイプ役となり歴史の過ちを共有する場を提示する。

最近の発表歴に、「Exposure: Native Art and Political Ecology」IAIA現代先住民芸術美術館(2022年、サンクフェ、米国)、「Yhonnie Scarce: Missile Park」(2021年、オーストラリア現代美術センター、メルボルン/インスティテュート・オブ・モダンアート、プリズベン、豪州)、「Looking Glass: Judy Watson and Yhonnie Scarce」(2020年、タラワラ美術館/フリンダース大学美術館、アデレード、豪州)など。



《霧箱 (Cloud Chamber)》【部分】2020
展示風景:タラワラ美術館(豪州)

Photo: Andrew Curtis Images courtesy of the artist and THIS IS NO FANTASY

塩見 允枝子

Shiomi Mieko

1938年岡山県生まれ。大阪府拠点。

1961年東京藝術大学楽理科卒業。在学中より級友達と「グループ・音楽」を結成し、テープ音楽の制作や即興演奏を行う。64年渡米し、フルクサスの活動に参加。65年スペシャル・ポエムのシリーズを開始。帰国後は、イヴェントをパフォーマンス・アートとしても発展させる。70年大阪へ移住。90年ヴェネチアのフルクサス・フェスティバルに参加したことから、国内外での多数のフルクサスの企画に携わるようになる。90年代には電子テクノロジーに興味を持ち、パフォーマンスに取り入れる。以後、音楽やパフォーマンス作品の作曲、視覚作品の制作など、活動は多岐にわたる。2014年より京都市立芸術大学・芸術資源研究センター特別招聘研究員。



《スペシャル・ポエム全集/本》1976

塩田 千春

Shiota Chiharu

1972年大阪府生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」、「存在とは何か」を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。

2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015年には、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展(イタリア)の日本館代表に選ばれる。また、ニュージーランド国立博物館テ・ハパ・トンガレワ(2020年、ウェリントン)、森美術館(2019年、東京)、南オーストラリア州立美術館(2018年、アデレード)、ヨークシャー彫刻公園(2018年、英国)、国立国際美術館(2008年、大阪)を含む世界各地の個展のほか、国際展などのグループ展にも多数参加。



《不確かな感》2016/2019 個展「魂がふるえる」森美術館、東京
Photo: Sunhi Mang, Courtesy of Mori Art Museum
©JASPAR, Tokyo, 2021 and Chiharu Shiota

田村 友一郎

Tamura Yuichiro

1977年富山県生まれ。京都府拠点。

既存のイメージやオブジェクトを起点に、写真、映像、インスタレーション、パフォーマンス、舞台まで多様なメディアを横断し、土地固有の歴史的な主題から身近な大衆の主題まで、幅広い着想源から現実と虚構を交差させた多層的な物語を構築する。それによりオリジナルの歴史や記憶には新たな解釈が付与され、作品は時空を超えて現代的な意味を問う。近年の主な個展に「Milky Mountain/裏返りの山」Govett-Brewster Art Gallery (2019年、ニュープリマス、ニュージーランド)、「叫び声/Hell Scream」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(2018年)。国際展の参加はヨコハマトリエンナーレ2020、2019アジア・アート・ビエンナーレ(台中、台湾)、釜山ビエンナーレ2018(韓国)、SeMAビエンナーレ・メディアシティ・ソウル2014(韓国)など。



《The Spider's Threads/蜘蛛の糸》2018
Courtesy of the artist

和合 亮一

Wago Ryoichi

1968年福島県生まれ。福島県拠点。

詩人。中原中也賞(1999年)、晩翠賞(2006年)、萩原朔太郎賞(2019年)などを受賞。2011年、東日本大震災直後の福島からTwitterで連作詩「詩の礫」を発表し、同年5月、世界三大コンサートホールであるオランダのコンセルヘボウに招致され朗読した。詩集「詩の礫」徳間書店(2011年)がフランスにて翻訳・出版され、第一回ニュク・レビュー・ポエトリー賞(2017年、フランス)を外国語部門で受賞。フランスでの詩集賞の受賞は日本文壇史上初となり、国内外で大きな話題を集めた。現在、新しい翻訳詩集の出版の準備中。詩のパフォーマンスが海外でも高い評価を得て「サムライリーディング」と称される。合唱曲やオペラ、戯曲の執筆も行う。みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2016などの芸術祭にも参加。



展示風景：展覧「わたしたちはまだ林檎の中で眠ったことがない」
第27回萩原朔太郎賞 受賞者 和合亮一展「水と緑と詩のまち 前橋文学館、群馬
Photo:木暮伸也、写真提供:水と緑と詩のまち 前橋文学館

渡辺 篤 (アイムヒア プロジェクト)

Watanabe Atsushi (I'm here project)

1978年神奈川県生まれ。神奈川県拠点。

大学時代から自らの経験を根幹とする、社会からタブーや穢れとしても扱われかねない要素を持ったテーマを批評的に取り扱ってきた。ひきこもりの経験を持つ渡辺は、主宰する「アイムヒア プロジェクト」によって、孤立・孤独の立場にある人々の声やその事情について、当事者との協働制作を通じて顕在化し、アートが社会に直接的な作用をもたらす可能性を模索している。

主な個展／プロジェクト展に「同じ月を見た日」R16 studio(2021年、神奈川県)、「修復のモニュメント」BankART SILK(2020年、神奈川県)など。主なグループ展に「Looking for Another Family」国立現代美術館(2020年、ソウル、韓国)など。2020年度横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。



《月はまた昇る》2021、プロジェクト「同じ月を見た日」
月の写真：アイムヒアプロジェクトメンバー
「同じ月を見た日」R16 studio(神奈川県) Photo:井上桂祐

西瓜姉妹 (ウォーターメロン・シスターズ)

Watermelon Sisters

2017年にコラボレーション開始。台北(台湾)／ベルリン(ドイツ)拠点。
余政達(ユ・チェンタ)1983年台南(台湾)生まれ。／黄漢明(ミン・ウォン)1971年シンガポール生まれ。

台湾出身アーティストのユ・チェンタとベルリン在住シンガポール人アーティストのミン・ウォンのコラボレーション。自分たちの分身であるウォーターメロン・シスターズは、自らの性自認を流動させつつ、ブッチ／フェム(男性的／女性的)集団出身のクィア姉妹として、人間の性的解放への道をヒップホップダンス「トワーク」で応援する。1960年代の京劇映画や台湾の映画監督蔡明亮(ツァイ・ミンリヤン)の作品からインスピレーションを受けたこのプロジェクトは、ラップ・ミュージック・ビデオ、写真シリーズ、ライブパフォーマンスで構成され、2017年9月にサンプライド財団と台北現代美術館が共同で開催したアジアの国立美術館における初のLGBTQをテーマとしたサーベイショを記念するために結成された。

これまでに参加した主な展覧会・イベントは、「Queering Now: Dreamality, Chinese Arts Now」(2021年、ロンドン、英国)、「Diagonal」Magician Space(2020年、北京、中国)、「Queering Umwelt」Tao Art Space(2020年、台北、台湾)、「Watermelon Sisters Go Camping in Paris」国立ダンスセンター(2019年、パリ、フランス)など。



《ウォーターメロン・ラブ》2017
Courtesy of the artist

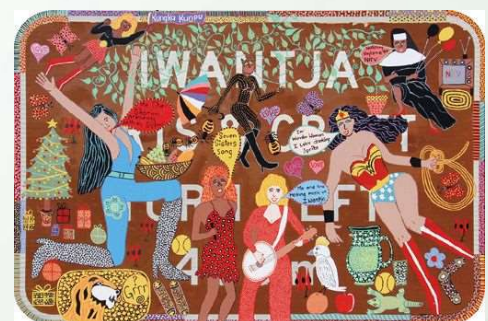
ケイリン・ウイスキー

Kaylene Whiskey

1976年ムントゥア(豪州)生まれ。インドゥルカナ(豪州)拠点。 ※ムントゥア(Mparntwe)は東アラダ語でアリスプリングスを指す。

オーストラリアの先住民コミュニティで現代生活を送るケイリン・ウイスキーは、アナング族の伝統文化とポップ・カルチャーを掛け合わせた作品を制作。長老たちの伝統文化と、ココ・コーラやミュージック・ビデオの影響を受けて育った若い世代たちの経験を遊び心たっぷりに結びつけている。

例えばドリー・パートンやティナ・ターナーといった象徴的アイコンを描くことで英雄的女性やシスターフッド(女性の絆)を称えながら、彼女らを人里離れたコミュニティの砂漠の風景に移植し、自生する植物や野生動物と交流させたり、狩猟、ブッシュ・タッカー(先住民アボリジニーが伝統的に利用している同国産の動植物)の採取、ミングルバ(自生するタバコの木)の栽培など、伝統的なアナング族の活動に従事させたりもする。ロック、ポップス、カントリーのサウンドに合わせて制作された破天荒なユーモアに溢れるウイスキーの作品は、異文化や異世代など大きく隔たる全ての人々を招き入れながら、みんなで楽しもう!と呼びかける。



《セブンスターズ・ソング (Seven Sisters Song)》2021
ビクトリア州立美術館
Courtesy of the artist. Iwantja Arts and Roslyn Oxley9 Gallery

イー・イラン

Yee I-Lann

1971年コタキナバル(マレーシア)生まれ。コタキナバル(マレーシア)拠点。

イー・イランは、東南アジアの歴史を題材に、植民地主義、権力、歴史の記憶などが現代社会に与える影響に言及する作品を制作。近年は、サバ州の先住民族らのコミュニティとの共同制作も行っている。

イーは、1994年からマレーシアの映画業界で美術の仕事を手掛け、2003年から2008年にかけてプロダクションデザイン部門を設立し、アカデミ・セニ・ブダヤ・ダン・ワリサン・ケバンサーン(国立文化遺産アカデミー/ASWARA)で講義も担当。foreversabah.orgのボードメンバーであり、コタキナバルにあるKota-K Studio & Kota-K Art Gallery(10×10×10ftのギャラリー・スペース)の共同設立者。

2021年に実施した展覧会は「Yee I-Lann & Collaborators: Borneo Heart」サバ国際会議場(コタキナバル、マレーシア)、「Yee I-Lann: Until We Hug Again」CHAT(香港)、インド洋工芸トリエンナーレ、ジョン・カーティン・ギャラリー(パース、豪州)、「Art Histories of a Forever War」台北市立美術館(台湾)、第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)など。



《ティカ・レーベン(マットのリボン)》2020
With weaving by Kak Roziah, Kak Sanah, Kak Kinnuhong, Kak Koddli
Private collection Photo: Pianegan Rainon

横野 明日香

Yokono Asuka

1987年愛知県生まれ。愛知県拠点。

ダムや高速道路などの公共建築物から、ポットや花瓶といった日常にあるものまで、幅広いモチーフを油彩で描く。人がものを見ていかに空間を感じるのかということに関心があり、構図やタッチ、絵の具の重ね方や色彩など、絵画の基本的要素を用いてそれを表現している。

近年の主な展示に、「あざみ野コンテンポラリーvol.10 しかくのなかのリアリティ」横浜市民ギャラリーあざみ野(2019年、神奈川)、「瀬戸現代美術展」瀬戸サイト(2019年、愛知)、「組み合わせ」See Saw gallery + hibit(2018年、愛知)、「不自由なしかく」GALLERY ZERO(2018年、大阪)など。



《高速道路のある風景》2019

チケットの種類と制度

- **フリーパス** 記名ご本人様に限り、各会場を何回でもご覧いただけます
- **1DAYパス** 入場当日に限り、各会場を何回でもご覧いただけます
- ※ **アップグレード** 会期中、一定金額(一般1,200円、学生800円)をお支払いいただくことで、1DAYパスからフリーパスへ変更できます

チケット料金

券 種		前売券	会期中販売券
フリーパス	一 般	¥2,500	¥3,000
	学生(高校生以上)	¥1,700	¥2,000
1DAYパス	一 般	¥1,500	¥1,800
	学生(高校生以上)	¥1,000	¥1,200

- ・中学生以下、障害者手帳をお持ちの方とその付添者1名は無料です。(チケット不要)
- ・学生区分適用の場合、チケット確認時に学生証の提示が必要です。
- ・学校向け団体鑑賞プログラムで来場される場合、学生及び引率者は無料です。(要事前申込)
- ・パフォーミングアーツについては、別途チケットが必要です。

特別販売券

チケットを10万円分以上もしくは100枚以上まとめて購入いただく場合、特別価格にて販売いたします。国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局へ直接お申し込みください。申込み方法等は公式Webサイトに掲載します。

券 種		特別販売券
フリーパス	一 般	¥2,100
	学生(高校生以上)	¥1,400
1DAYパス	一 般	¥1,200
	学生(高校生以上)	¥ 800

販売時期

チケットは2022年4月1日より販売予定。

※販売場所等の詳細は、3月末までに別途、発表いたします。